レ・クレドール ジャパン会報誌 “キー・ニュース”

Les Clefs d’Or Japan

Key News

2025年　第74号

発行： 今泉愛子

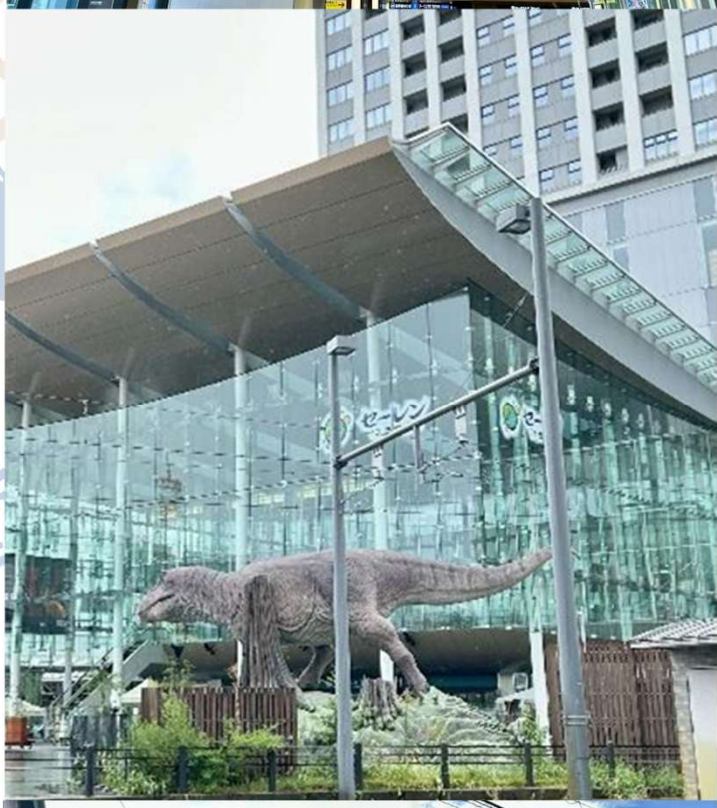
編集：嵯峨崎のぞみ　米谷紗央里　増田悟

Website : lesclefsdorjapan.com　Les Clefs d’Or Japan　lesclefsdorjapan

福井県視察

文：亀井 理世

2025年9月4日～5日の2日間、レ・クレドール ジャパンと日本コンシェルジュ協会メンバー12名が、公益社団法人 福井県観光連盟主催の観光素材視察ツアーに参加しました。
昨年3月の北陸新幹線 福井～敦賀間の開業により、令和6年の観光客入込数や観光消費額は過去最高を記録し、開業効果はますます広がっているそうです。福井県では、観光地や宿泊施設のリニューアル、新たな魅力づくりや体験メニューの造成、インバウンド受入れ環境の整備などが積極的に進められています。こうした背景のもと、新たな観光素材への理解を深め、今後の誘客に繋げることを目的に、今回の視察が実施されました。



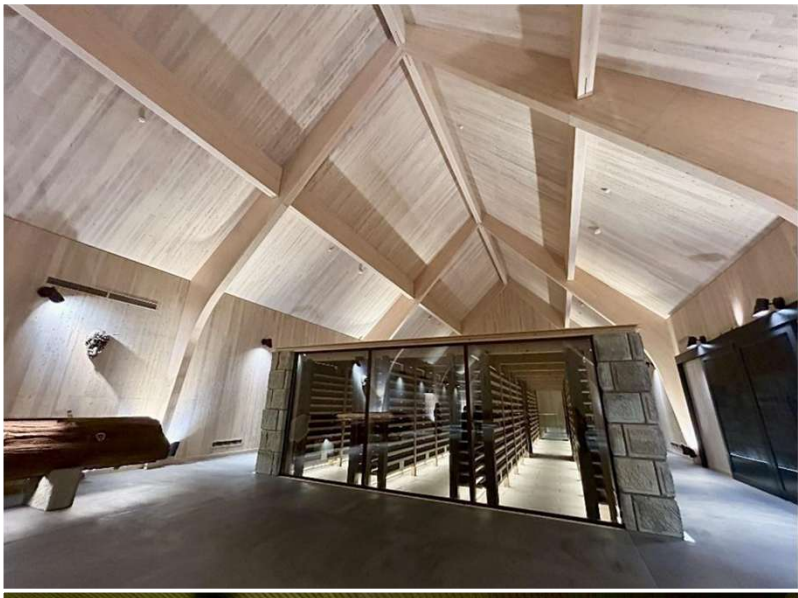
ツアーのコンセプトは「日本の美と伝統文化が息づく、ZEN x CRAFT x FOOD に出会う旅」。コンシェルジュとして、お客様にどのようなストーリーを添えてご案内できるかを意識しながら、豊かな自然と歴史・文化が息づく福井を巡りました。特に、福井郷土料理研究家・佐々木京美氏による食文化の解説は、料理の背景や生産者の想いをお客様にお伝えする上で、より深い体験をご案内するヒントが沢山ありました。
最初に訪れたのは、昭和天皇にも献上した歴史ある老舗そば処「うるしや」です。抹茶を練り込んだ名代おろしそばを含む蕎麦懐石をいただきました。大根おろしの辛味と風味豊かな在来種そばの相性が絶妙で、食文化の奥行きを感じられる体験でした。

続いて、ものづくりが集まる越前・鯖江エリアへ。半径10km圏内に越前和紙、越前漆器、越前打刃物、越前焼、越前箪笥の5つの伝統工芸品、眼鏡、繊維の2つの地場産業が集まる、日本でも稀なエリアです。

最初に訪れたのは、越前和紙の里　今立地区です。全国に数ある和紙産地の中でも1500年という長い歴史と最高の品質と技術を誇る、越前和紙の産地です。江戸時代に紙幣の透かし技術を開発し、今も日本銀行券にその技術が生きているという解説が印象的でした。滝製紙所では、手漉きと機械漉き両方に対応する現場を間近で見学しました。ホテルや店舗などで使われる創作和紙も手がけていらっしゃるそうです。和紙がアート素材として無限の可能性を秘めていることを実感させてくれました。

その後、紙の神様を祀る岡太神社・大瀧神社を参拝。日本一複雑と言われる屋根と、精巧な彫刻が全面に施された社殿は圧巻で、とても見ごたえがありました。海外ゲストに和紙の里をご案内する際にはオススメしたい特別感のあるスポットでした。

次に訪れたのは、鯖江市にある越前漆器の老舗「漆琳堂」です。1793年創業のこの工房では、伝統を受け継ぎながらも、カラフルで、現代の生活様式にも適したモダン漆器など、新しい価値を提案する姿勢が印象的でした。特に食洗機対応の漆器は、海外ゲストにもおすすめしやすいアイテムで、
お土産の提案にも繋がると感じました。



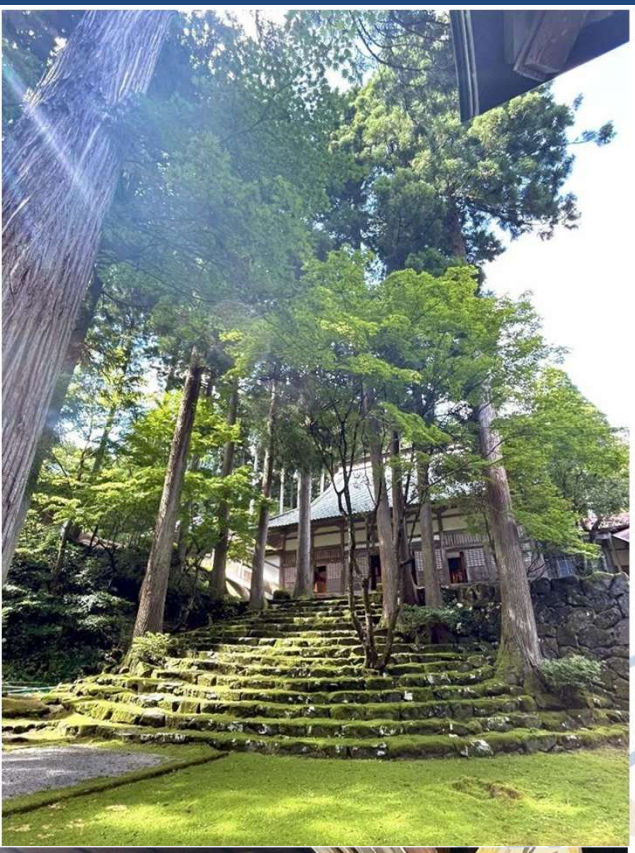
続いて、黒龍酒造が手がける複合施設「ESHIKOTO」を見学しました。九頭竜川沿いの景観を生かした美しい施設は、日本酒ファンだけでなく建築やデザインに興味のあるゲストにもおすすめできます。
宿泊施設「歓宿縁」は全8棟のオーベルジュで、半露天風呂付きの客室が並ぶ贅沢な空間でした。直営店「石田屋 ESHIKOTO店」では、ここでしか購入できない希少な日本酒が多数揃います。同じ敷地内には、その他にベーカリー「HAREYA」、隈研吾氏設計の蕎麦屋「蕎麦　山や」があります。夕食はレストラン「Apero & Patisserie acoya」で地元の食材を生かしたお料理をいただきました。

宿泊は、福井駅前にあるコートヤード・バイ・マリオット福井。駅から徒歩2分と好立地で、お部屋やレストランからは市内が一望できる快適な空間でした。

2日目は、白山信仰の重要拠点「平泉寺白山神社」からスタート。苔むす石畳と杉並木が続く境内は、訪問時に降っていた小雨のおかげで苔の緑が一層鮮やかに映え、とても幻想的な雰囲気でした。

続いて訪れたのは、曹洞宗の開祖・道元禅師が永平寺を開く前に修行した道場、吉峰寺です。静かな山あいに佇む寺院で、道元禅師が坐禅を組んだと伝わる「坐禅石」や、弟子が粥を運んだ「徹通坂」など、禅師の足跡をたどることができます。

今回は石上禅師による境内のご説明を、ガイドの方が英語に通訳しながらご案内くださいました。昼食には精進料理をいただき、一つひとつの行いに丁寧に向き合うという禅の教えに触れることで、心に響く体験となりました。日々の生活や仕事において大切にしたい心構えを、改めて見つめ直す貴重な機会となりました。



この体験で、以前レ・クレドールジャパンの定例会で都内でミシュランの精進料理店を営むご主人が「超富裕層のお客様は“Luxury”という言葉に対して精神的な意味を見出される」とお話しされていたことを思い出しました。吉峰寺で過ごした時間は、まさに物質的な贅沢ではなく、精神を整える特別なひとときだと感じます。

視察の最後は芦原温泉エリアへ。
「光風湯圃べにや」は全室に源泉かけ流し半露天風呂を備えた老舗旅館です。プライベート感が高く、静かに過ごしたいゲストに理想的です。
「グランディア芳泉」では、きびきびとしたスタッフの接客と明るい雰囲気に迎えられ、人気の理由を実感しました。
芦原温泉は家族経営の宿が多く、後継者問題の心配が少ないそうです。この地で育った若い世代が互いに協力し合い、町全体を盛り上げているとうかがいました。地域全体に活気があり、今後ますますの発展が楽しみな温泉地です。全体を通じて感じたのは、福井は観光素材が点在しているため、旅程づくりにおいて移動手段やルート設計が重要だと感じます。

今回の視察でお世話になった一般社団法人SOE様をはじめ、ふくいヒトモノデザイン株式会社様など、地域の窓口と連携しながら、お客様により深く日本の魅力を知っていただける旅のご提案をしていきたいと思いました。

マーク・パターソン氏 ミニセミナー

文：竹内秀太

9月2日、マーク・パターソン氏をお招きし、「The Relations Code」と題したご講演をいただきました。

パターソン氏が伝えたメッセージは、とても共感できるものでした。「人は、知っていて、信頼でき、そして好感を持てる人と関わりたい」。時代が移り、ホテル業界も技術も進化していきますが、この一見当たり前に思える人間関係の原則は、特にラグジュアリーホスピタリティの世界において、今後ますます価値を高めていくと語られました。講演の中で、パターソン氏は次の問いを投げかけました。「まったく同じ条件の二つのホテルが隣にあり、しかし価格帯が異なった場合は、どちらを選びますか？」人は安さに惹かれると思われがちですが、実際には「信頼できる人がいるホテル」を選ぶことが多いといいます。つまり選ばれる大きな理由は“価格”ではなく、“人”とのことです。
パターソン氏は1979年、シェラトン・コペンハーゲンでベルスタッフとしてキャリアをスタートしました。そこで出会った師、Mr. Arshad Khokhar（元レ・クレドール デンマーク会長）の温かさと気遣いが、今も彼の考えの中心にあると振り返ります。その原体験が、彼を国際的な舞台へ導き、「人とのつながりこそがホスピタリティの原点」という信念につながったのです。
印象的だったのは「ネットワークの大切さ」に関するお話です。
コンシェルジュの仕事は、予測できないリクエストや課題の連続ですが、その解決の糸口となるのが人とのつながりであり、それは蜘蛛の巣や漁網のように広がり、互いを支えていくと例えられました。
また、長年築いた信頼関係のような「強いつながり」だけでなく、出会ったばかりのまだ「弱いつながり」も同じように重要だと強調されました。新しい出会いは新しい可能性をもたらし、多様な人と交流することや、多方面に人脈を持つ“ハブ”のような存在との出会いが、大きな成長につながるのだと語られました。

コロナ禍によって人と会う機会は減りましたが、逆に「直接会って話すこと」の価値が再認識されたといいます。さらにAIの進化についても触れ、AIは業務を助ける有用なツールではあるものの、人間が生む、信頼や繋がりの力は決して代替できないとお話いただきました。むしろAIが普及するほど、人の役割はより重要になるのだと。

最後に彼は「与えること（Give、 Give、Give）」こそがすべての基本だと語りました。時間や気持ち、信頼を惜しみなく与えることで、人々の心に残る体験をつくり、周囲を豊かにしていけるのだと。
私自身も、この考え方に共感し、またテーマにあったAIなどの技術は私たちの効率を高めてくれますが、ホスピタリティの本質である「人と人とのつながり」は人間にしか築けないことも気づかされました。
未来をつくるのは技術そのものではなく、人と人との絆であると、改めて強く感じました。

紀伊山地視察

参加者：小嶋しのぶ、丸山ひろみ、山田祐美、桃井忍

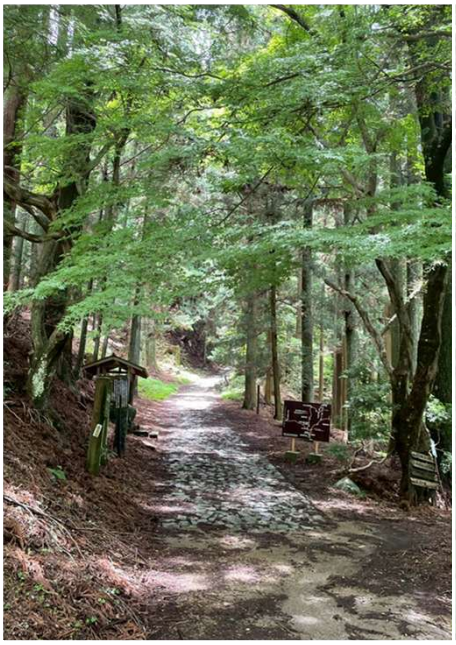
観光庁のモデル観光地事業の一環である、「紀伊山地」エリア視察に4名が参加いたしました。2025年6月25日から1泊2日で奈良県吉野、洞川温泉、天川村、和歌山県の高野山などを巡りました。

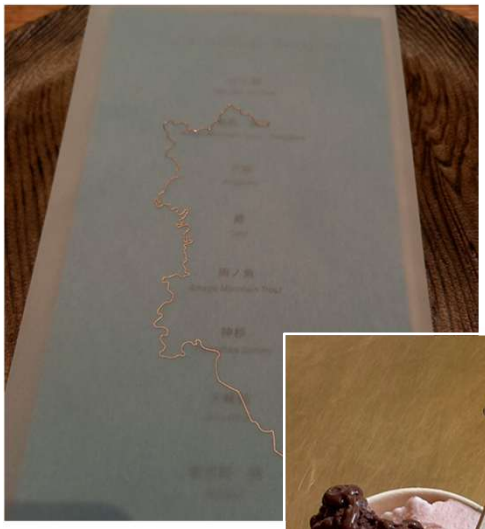
1日目

金峯山寺
一帯は有名な桜の名所で、桜のシーズンには大変な人出で賑わいますが、視察した当日はとても静かな時間が流れ、ゆっくりと拝観することが出来ました。拝観前に「峙—SOWA」という新しくオープンした施設内にある“金峯寺シアター”で秘仏の蔵王権現像などを中心とした美しい映像を拝見したのですが、英語の字幕もあり、大変わかりやすい説明で、理解に役立ちました。
金峯山寺は修験道の開祖と言われている役行者（えんのぎょうじゃ）が白鳳時代に金峯山の山頂にあたる、山上ヶ岳にて一千日の修行をしたのち、金剛蔵王大権現を感得し、修験道の本尊としました。役行者はそのお姿をヤマザクラに彫り出し、山上ヶ岳の頂上と山下にある吉野山にお祀りしたことが、金峯山寺の開創と伝えられています。
桜の季節には大変込み合う吉野山ですが、新緑の季節はこの緑を独り占めできるでしょう。

吉野
桜の季節には「原宿」のように人でいっぱいになるそうですが、グリーン吉野は現在のところ独り占め状態。深い緑を楽しむことができます。
すそ野を見渡せる場所に到着すると目の前に広がる緑。
22世紀吉野桜を愛でる会では、桜の木を購入して植樹することが可能だそうです。購入すると、木に名札を付け、植えてある場所の地図もくださるそうです。

櫻本坊
その後櫻本坊までは２０分ほど、副住職はドイツ人で仏教、神道、修験道に精通されており、護摩や写経、写仏などの体験も、英語、ドイツ語でのご説明が可能とのことでした。





SEN（流域料理）とTENKARA GERATO
山や川の生態系に配慮しながら共存するというコンセプトで、穏やかでゆったりとした空間と体に優しく美味しい料理を楽しむことが出来ました。ロンドンで生まれた砂山利治氏はフランスを務めました。その後、結婚を機に奈良県天川村に移住。まずは「TENKARA GERATO」を開業。2025年にSENを開業し、この土地のでしか味わえない料理を提供しています。天川村は熊野川最上流に位置し、奥吉野と呼ばれる地域です。砂山氏は、この土地の自然環境と食文化を守る、この地産地消の精神こそ、表現したい料理だと考え、「流域料理」と名付けたそうです。大きく横に広がるお店の窓からは、一日の時の流れを感じる景色を楽しめます。そしてテーブルには吉野杉で作ったプレートやカトラリーレストが用意されており、地元アーティストのオリジナル作品を堪能できます。
宿泊は、古くから大峯信仰の登山基地として栄えてきた洞川温泉でした。
自然が神、そして山は神の体内とされる修験道では、山伏たちは身を清めてから山に入り、その体内で幾日も過ごして行を行ったそうです。山伏たちの宿泊地として栄えたのが洞川温泉です。洞川温泉全ての宿には長い縁側が設えてあります。山伏たちは山で修業し、町に戻るとその縁側で汚れた足を洗い流して宿で休みます。山伏は身を清めて山で行をこなし、人間界に戻って「半僧半俗」の生活をします。これはお釈迦様のおっしゃる「中道」の実践です。
宿は角甚に宿泊しました。洞川温泉ではすべての建物の軒先に提灯を灯しています。これは町の情緒を守る取り組みで、夜になると幻想的な風情を作り出し、町全体が協力しあってノスタルジックな雰囲気を醸しだしています。宿は創業350年の老舗宿、洞川温泉唯一の露天温泉風呂付客室2部屋と貸し切り露天風呂が2006年にリニューアルされたとのことでした。夕食は地元の山の恵、鴨とイノシシの鍋でした。鍋には地元の名水、ごろごろ水で作ったお豆腐も入り、しめはリゾット！このリゾットは出汁も効いた格別の一品でした。

2日目

龍泉寺での護摩行体験、水行体験から始まりました。護摩行は薄暗い本堂で、ほら貝の音とともに厳修され、参加者一同、その迫力に圧倒されました。護摩焚きでは、最後に住職から炎を掴むように言われ、炎を掴むと、煩悩が焼かれるとのことでした

水行は境内の「龍之口の霊水」という湧水を湛えた池で行われ、年中10℃と言われる水温の中、始めは冷たく感じていたのですが、だんだん温かさを感じ、終了後はすっきりと、すがすがしさを感じるという不思議な感覚を体験いたしました。修行から戻り、街に帰る前に煩悩を焼き払うために行われた護摩行、その両方を体験できたことは大変貴重な経験となりました。煩悩を落とした後は、一旦、温泉で温まってから、高野山へ向かいました。途中「TENKARA GERATO」でジェラートをいただき、「俗」に戻ってきた喜びをかみしめました。

ランチは清浄心院にて精進カレーをいただきました。金色の壁の和室でいただくカレーはその一つ一つにしっかりとハーブの味がしみ込んでおり、ボリュームもあり大満足の一品。

蓮華定院　宿坊見学

宿坊とは思えない豪華なお部屋の数々。バス・トイレ付きのスイートルームが創設されており、より広いニーズに応えられるようリニューアルされていました。

奥之院と壇上伽藍

「金剛峯寺境内案内人免許」を持つ、高野山在住の以前僧侶だった方に、ご案内いただきました。ガイドツアー中には、高野山の歴史や文化、寺院での日々の生活や空海の教えまで幅広く、いろいろな質問にも丁寧にお答えいただきました。英語での対応も可能とのことでしたので、日本人の宗教観や精神性にご興味のあるお客様にもご満足いただけるのではないかと感じました。

高野山奥之院は和歌山県、高野町に位置する真言宗の総本山金剛峯寺の一部で、弘法大師空海の御廟がある場所です。御廟では834年から弘法大師が永遠の瞑想に入定したとされ、今も瞑想していると言われています。

一の橋から3つの橋を渡る2ｋｍの道のりはあの世とこの世の境目とされ、3つ目の橋を渡ると弘法大師の御廟となります。

五輪塔は、日本の仏教文化において極めて重要な意味を持つ供養塔です。単なる墓石ではなく、宇宙の根本原理であり、一番下の石から「地・水・火・風・空」の五大要素を形に表した神聖な仏塔です。また、高野山の苔は、単なる装飾ではなく、自然と歴史、宗教が融合した景観の一部です。高野山真言宗においては宇宙そのものが仏であり、あらゆる存在は大日如来の顕現であると考え、アニミズムとの思想的な親和性が高くなっています。密教と呼ばれる真言宗。密教ではよく月と蓮の花の模様が良く使われます。弘法大師は「人の心は月のようだ、そして人生は蓮の花のようだ」と例えました。月は本来丸いものであり、地球から満ち欠けているように見えても実際には丸いものです。蓮の花は泥の中から美しい花を咲かせます。それはまさしく人の人生と同じ、弘法大師はその様子が人の心と人生によく似ていると話されました。密教では、別のものを理解するために、その様を何かに例えることが良くあるそうです。
高野山奥之院は訪れる人々の精神世界を広げる特別な場所だと改めて感じました。

壇上伽監
高野山の中心に位置し、真言密教の根本道場として弘法大師が開いた場所です。中には弘法大師の教えを象徴する曼荼羅が立体的に表現されています。
伽藍とは僧侶が修行する場所という意味で、サンスクリット語が語源です。
山岳信仰、修験道、修行や宿坊など、日本人にとっても非日常の空間に身を置くことが出来るこのエリアは、海外からのお客様にも、とても興味深く感じていいただけるのではないかと思います。自然に触れ、その中に身をおき、自分の心と向き合うことのできるのが紀伊山地だと思いました。
古くからのしきたりや風習により、一部不便を感じることもあるかとは思いますが、
それも文化体験であり、事前のご案内を十分にすることにより、是非お客様にも素晴らしい自然と信仰に彩られたこの地域をお楽しみいただきたいと心から思いました。

伊勢志摩視察

6月11日－12日
参加者：齋藤 美紀、山本美砂、米谷紗央里

観光庁の「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり」の一環として、モデル観光地である伊勢志摩エリアの視察に参加して参りました。

近鉄特急しまかぜに乗り込み、ツアーはスタートしました。電動リクライニング搭載の座り心地の良い、ゆったりとした座席から車窓の景色を楽しむうちに終点、賢島駅に到着しました。賢島駅では、観光庁、国土交通省中部運輸局、日本政府観光局、伊勢志摩観光コンベンション機構のご担当者様、そして現地通訳案内士の方に温かく迎えられ、駅近くの和食処「みやぎ野」での昼食ブリーフィング後、車で志摩町御座方面へ出発。国道から山手の細い道を進むと、伊勢志摩国立公園の一部で、真珠養殖の一大産地として知られる英虞湾の美しい景色が見えてきます。昭和の佇まいを残す真珠工場や湾に浮かぶ真珠筏など、英虞湾の御座・烏賊浦(ござ・いかのうら)で真珠養殖が栄えたことを想わせるレトロな景色が広がっていました。

はじめに訪れた真珠体験の「パール美樹」では、オーナー山岡様より、真珠養殖の歴史や養殖の過程、またその難しさなどを教わりました。稚貝を育成し、成長した貝に真珠の元となる核入れをし、成長過程での貝の清掃など手間暇を惜しまず育てても、病気や環境に適応できず、約半分の貝は死んでしまうといわれます。真珠筏の上で、アコヤ貝の成長過程を見せていただき、実際に真珠を貝から取り出す体験をさせていただきました。アコヤ貝から真珠が生まれる瞬間は、とても神秘的で、特別な体験であり、大切に育てられた真珠の美しさは、時代を超えて人々を魅了し、まさに自然の中で年月をかけて作られた造形美だと感じました。

烏賊浦を後に、宿泊先となる 「COVA KAKUDA」 へと向かいました。1970年頃まで真珠養殖工場であった建物の骨組みを残しリノベーションされ、2023年にオープンした COVA KAKUDA は、英虞湾を目の前に入江に浮かぶように佇むプライベートヴィラです。

季節の野菜や様々なハーブ、果実が実る里山での収穫体験や養蜂体験など、ここでしか体験できない数々のアクティビティがあり、総支配人の天羽様はじめ、スタッフの方々の心地よいサポートで、どの体験もリラックスして楽しむことができました。とても1泊では足りないと感じさせてくれます。サンセットクルーズでは穏やかな英虞湾の上で、時間が経つのも忘れて心地よい風を感じ、美しい夕景を楽しみました。夕食には里海 Cuisineとイタリアン、和食といったジャンルで区切れない、
魚介をはじめ地元の食材を使った伊勢志摩の魅力が詰まったお料理をいただきました。そして夕食後には焚火の前のキャンプベッドに寝転がり、満点の星空を眺め、心身ともにリラックスをして一日を終えました。

二日目は、日本の総氏神 天照大神を祀ることで知られる伊勢神宮の内宮を参拝し、おはらい町、おかげ横丁を訪問しました。
伊勢神宮へは江戸時代には半年間に 500万人もの人が全国から「お伊勢参り」に訪れたといわれます。伊勢志摩エリアを中心に活躍する通訳案内士の方にご同行いただき、伊勢神宮の見どころや、おすすめの参拝ルート、また式年遷宮についても学びながら、荘厳な空気に包まれる内宮を参拝しました。伊勢神宮前の800メートルにもおよぶ石畳の通り「おはらい町」では、人力車乗車の体験をさせていただき、通りの活気を感じながら五十鈴塾へと向かいました。五十鈴塾は日本文化や伝統など、伊勢の風土ならではのことを学べる文化施設として活用されています。株式会社伊勢福様、公益社団法人伊勢志摩観光コンベンション機構様より、しめ縄や松坂木綿、組紐や擬革紙（ぎかくし）などの伝統工芸体験の観光コンテンツについて情報を共有いただきました。

その後、おはらい町の食事処や工芸店をご紹介いただきながら、江戸時代後期から明治時代の街並みを再現した「おかげ横丁」へ移動し、50余りのお土産屋や食事処で賑わう横丁を視察しました。
そして、おかげ横丁を後に、宇治山田駅近くの「割烹大貴」へ向かい、地元の食材を活かしたお料理を昼食にいただき、視察は終了しました。

その後、三重県庁舎にて、今回の視察のフィードバックをもとに意見交換会が開催されました。国土交通省観光庁、国土交通省中部運輸局、観光局のご担当者様をはじめ、三重県と伊勢市の観光誘客課、伊勢志摩観光コンベンション機構のご担当者、そして今回の事業を支える様々な関連業者の皆様と交流する大変貴重な機会をいただきました。
伊勢へのアクセスや現地での移動について、近鉄グループホールディングス株式会社様や三重近鉄タクシー様と現状や課題について情報を共有し、COVA KAKUDA様、パール美樹様、通訳案内士の方とは今回の視察を通してのフィードバックを共有させていただきました。
江戸の頃から時を経てもなお、日本人旅行者が多く訪れる伊勢志摩エリアには、そこでしか体験できない、味わえない魅力がたくさんあることを、今回の視察を通じて再認識いたしました。
今回私たちが出会った美しい風景、伊勢志摩という土地が持つ特別な時間、風土や文化、そして何よりも地元の方々の温かさは、いつまでも変わらずにいてほしいと思うとともに、多くの旅行者に知ってもらいたいと強く感じました。
今回発見した多くの魅力的なコンテンツをもとに、私たちコンシェルジュがその魅力を発信する一助となれるように努めて参りたいと思います。

定例会報告

文：増田悟
嵯峨崎のぞみ

9月

９月定例会は、ザ・リッツカールトン福岡バー「BAY」VIPルームにて行われました。

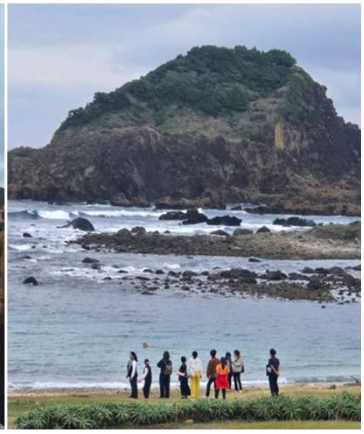
第一部では、各コミッティーメンバーより現在進行中の取り組みや、今後の活動予定についての報告がありました。
10月23日から開催されるアジアンコングレス、そして2026年1月に予定されている日本コンシェルジュ協会との共催セミナーのフライヤーが完成したことも共有され、士気が一層高まりました。
これらの重要なイベントに向けて、準備を着実に進めるとともに、メンバー一同が心を一つにして取り組んでいくことを改めて確認し合いました。

第二部では、JR九州が誇る豪華寝台列車「ななつ星」の専用ラウンジ「金星」を特別に見学させていただきました。普段なかなか立ち入ることのできない空間への訪問は、たいへん貴重な機会となりました。

ラウンジ見学の後は、実際の乗客と同様のルートでプラットホームへと移動し、その後会議室にて、ななつ星のコンセプトや運行に込められた想いについて、職員の方からご説明をいただきました。

10月

10月の定例会は、下田東急ホテル 大宴会場パルミエで行われました。

第一部では、活動報告と1月に開催予定の共同セミナーの進捗について共有がありました。
また、将来レ・クレドール入会を目指すコンシェルジュとの交流の機会についても議論しました。従来のレ・クレドールランチのみでは定期的な開催が叶わないため、新たな交流の場を設ける可能性について意見を募りました。引き続き入会に興味のあるコンシェルジュや若手コンシェルジュが参加しやすい仕組みを検討してまいります。

第二部では下田市のツアーに参加いたしました。下田水中水族館までバスで移動をして、日本コンシェルジュ協会のメンバーと合流。伊豆半島認定ジオガイドのお二人の案内で、伊豆半島ユネスコ世界ジオパークを散策し、伊豆半島や下田の成り立ちについて学びました。その後、黒船遊覧船に乗船し、海上からの景色を楽しみました。昼食は「市場の食堂 金目亭」で、金目鯛のお刺身と煮付け定食を堪能。最後に伊豆急下田駅で解散となりました。下田の歴史と観光地に触れる、非常に有意義なひとときでした。